

受講番号 19079 学校名 鷹ヶ池中学校 氏名 森下 敦子

研究の背景

研究対象(学年、クラス等) 1年A/B組 生徒数 50 名
科目名 1年生 単位数(授業時数) 3 時間 使用教科書名 New Horizon English Course 1(東京書籍)

クラスの様子・特徴

落ち着きがなく、授業規律が十分でない生徒が一部いるが、全体的には明るく元気で、大きな声で音読練習もできる。地道な作業を嫌う傾向があるが、こつこつとよく努力し、力をつけている生徒も少なくない。

問題の確定

反復練習に取り組む姿勢が弱いため、基本的な語句、表現、基本文型が定着していない。特に『書くこと』を苦手とする生徒が多い。

予備調査

A 授業の観察

ペア活動や音読練習は大きな声でできる。授業中の反応は良好でも、定着となると弱く、家庭学習の必要性を痛感する。『口では言えるが正しく書けない』生徒が多い。

B 生徒による授業評価

約8割の生徒が授業に対して『満足・だいたい満足』である。ただ、生徒同士の関わりが弱いまたは不足だと感じている生徒が4割程度。また、『英語が好き』『英語が嫌い』が5割ずつ。自分に不足かつつけたい力は4割が『書く力』で1番多い。

C 学力データ

定期テストでは作文問題の得点率が低い。単元テストは英文の並べかえと単語(日本語から英語)のみの問題であったが、平均点は約5割。同時期に実施したリスニングテストの平均点が約7割であるのに比べて、明らかに低い。

リサーチ・クエスト

語順を理解し、書く力を伸ばすにはどのような指導をすればよいか(ゴールは関連性のある文を3文以上書けること)

仮説・実践・検証

仮説1

『指し読み』で発音練習することにより文字と発音が結びつき、語彙習得ができるであろう。また、『聞き取りテスト』を継続的に実施すれば、単語の習得に効果的であろう。

⇒

実践1

発音・音読練習時は『指し読み』をクセづけるよう、継続的に指導した。小テストについては、以前実施していた10問の単語テストを5問の聞き取りテストに改め、取り組みやすく、覚えやすく、かつ、文字と発音・意味が結びつきやすいように工夫した。問題数を減らした代わりに、必ず文を1つ聞き取って書くようにした。

⇒

検証1

指で単語または文を指しながら読むことで文字と発音が結びつく効果を狙ったが、面倒くさがる生徒には定着が弱かった。ただ、その活動の意義を説明したことから必要性を感じ、納得した生徒たちには効果があった。『聞き取りテスト』は取り組みやすかったのか、以前の単語テストに比べて得点率が高くなった。満点の生徒が約半数を占める。テスト前の家庭学習で取り組む生徒が増えたのは一定の収穫といえる。

仮説2

新出文型を学習する際、なかまと協力し、語順を意識して英文を作る活動をすれば、英語の文の構造に自然に慣れていくであろう。

⇒

実践2

新出文型を学習する際には、意識的に語順を提示するようにした。繰り返し学習する中で、語順には規則性があることを見つけ出し、応用できるようになることをねらった。基本的にはワークシートを使ってペアまたはグループで協力しあって英文を作る活動と、日本人を英文にする活動を実施した。個人の作業にこだわらず、協同的な学びを仕組むことにより、全員参加の授業・生徒の取り組みの向上を目指した。

⇒

検証2

和文英訳の作業は、語順を意識しながら『書く』ことにこだわった。単語力の不足するグループやペアも助け合いながら作文しようと頑張った。協同的な学びを仕組むことで授業の取り組みが改善された。個人での作業は、単語力不足の生徒には厳しい。絵や写真を説明する文を作ることは協力してよく出来、グループで5文から17文作ることが出来た。『書く』となると難しく、口頭で発表なら出来るが、正しく書けないという実態がある。

仮説3

英作文に関するコンテストを実施し、クラス対抗の取り組みを仕組むことにすれば、積極的に取り組み、自然に『書く力』に結びつくであろう。

⇒

実践3

クラス対抗『MAGIC WORD CONTEST』の取り組みを ①決められた単語を使った文 ②決められた絵(写真)に関する文 ③前記のどちらかまたは両方(単語1ポイント、写真(絵)3ポイント)の①から③の条件を満たす英作文を段階をふんで実施した。強制はせず、自主的活動とした。

⇒

検証3

強制でないのが原因か、最初は取り組みが弱かった。学年の先生がたを巻き込んで、生徒に呼びかけをしてもらったこともあって、徐々に参加者が増え、競争が激化していった。当初の予想を大きく上回り、1ヶ月半で1クラス3400から4500ポイントも集めた。作文の正解率も順調にあがったことから、一定の成果が認められる。ただ、今回は『質より量』の取り組みとなったので、次は質の向上が求められる。

研究の成果

『英語が苦手』で、英作文には興味を示さなかった生徒も、今回の取り組みで少しは英作文に対する苦手意識が払拭されたのではないかと。実践1の『聞き取りテスト』は毎回半数が満点をとるようになってきているのは大きい。実践2は継続することで成果があがると信じている。実践3の取り組みは終了したが、アンケートの結果からもなんらかの新しい取り組みを実施したい。『関連性のある文を3文』のゴールに直接結びつく取り組みが出来ていないこと、実践3の取り組みが全員参加のものにならなかったことが課題であり、継続して取り組む必要がある。

今後の授業改善の課題

『聞く、話す、読む、書く』の4技能。それぞれをバラバラに力をつけることは不可能である。バランスよく力をつけられるような授業展開が必要である。今回設定したゴールはまだ達成されていないので、今年度中にゴールインしなければならない。生徒たちが1番盛り上がったコンテストの取り組みが、自主的活動でありながら全員参加となり、新しい英作文指導が工夫できればベストだと考える。

リサーチについての問合せ先:

職場電話

088-864-2678